

実践まとめシート（2年次）

研究グループ	地域を発見探究	実践グループメンバー	千葉麻、花田
--------	---------	------------	--------

実践タイトル	
『小学部・生活単元学習「なつさがし」における地域資源を活用した授業の学習効果について』	
<p>I 問題と目的</p> <p>1年次の実践では、学校周辺にはない豊富な自然資源において直接体験的な活動を行うことで、児童は秋に関する新しい物を発見し、学校周辺では得られなかった気付きを得ることができた。次々と生まれる自然発生的な気付きや疑問に対して、外部講師の方に専門的な情報をすぐに返答してもらったことで、学習効果が高まった。また、秋についての学習が深まったことで、児童が身近な地域資源や地域の方々を知り、関わる機会になり得たのではないかと考える。一方で、より学習効果を高めるため、地域資源を活用した学習の学習形態や設定回数の検討、個々の児童が地域人材とコミュニケーションを図ることが出来るような環境設定や支援の検討が必要であることが確認された。</p> <p>児童が身近な地域資源や地域の人々に触れる機会には個人差があることに加え、発達段階的にも実態的にも生活経験の場を自らの力で広げていくことは難しい。また、学校における通常の学習は、担任及び担任以外の小学部の教師が行い、身近な大人以外から学ぶ機会は少ない。そのため、身近な地域と触れ合うことで、生活経験の場を拡大したり、将来的には、身近な人々や事物に自分から働きかけ、自分の生活をより豊かなものにしようとしたりする力を身に付けていく力が望まれる。さらに普通の学習においては、可能な限り直接体験的な活動を取り入れているものの、学習内容によっては、限られた範囲や内容になり、十分な資源の中での学習が実施できていない。そのため、児童がより視野を広げ、思考を深めていくためには、直接体験的な学習の機会を十分に確保することが必要である。</p> <p>1年次の実践で課題と思われた、児童と地域の人たちとのより積極的・自主的な相互のコミュニケーションの促進を念頭において、本実践では、より多様な地域の人たちとの交流機会を設定する。児童と地域資源相互の関わり合いがある活動を行うことで、児童の学習意欲向上や身近な地域の夏の自然や遊びなどについての知見の広がり、地域の人への興味・関心や関わりに対する積極性の高まりを期待したい。</p> <p>本実践の児童の目標として、①夏の自然を観察したり関わったりする活動を通して、身近な自然の変化をとらえ、夏の特徴や他の季節との違いに気付くことができる。②身近な自然や生活に関する発見を通して、自分の生活を楽しくしようとする。③七夕会で、お世話になった地域の人のためにできることを、自分で考えたり準備をしたりすることができる。④地域には様々な分野に関連する人がいることに気付くことができる。を設定し実践を行う。</p> <p>本実践を通して、地域資源を活用した学習効果について、学習形態の違いによる児童の自主性の高まりについて、地域人材活用学習の継続と拡大について、小学部低学年段階における地域との関わり意義について、地域の方々との打ち合わせについての5点について検討する。</p>	
II 実践方法	
<p>1 対象児童・学級・学習グループについて</p> <p>本研究で対象となるのは、小学部1年2名、2年3名の計5名である。軽度の知的障害と自閉スペクトラム症を併せ有する児童が多い。不思議さや面白さがあり、好奇心が掻き立てられたり、直接体験ができたりする学習に対しては特に学習意欲が高い。コミュニケーション面においては、構音障害があり発音が不明瞭な児童が2名いるが、全員が一斉指示をおおむね理解でき、言語による簡単なコミュニケーションが可能である。また、気付いたことや疑問に思ったことを自分から発言できる児童が多い。ただし、誰にでも積極的</p>	

に話し掛ける児童がいる一方、慣れ親しんだ相手以外とは関わりに慣れるまでに時間を要する児童もいる。

これまでの季節の学習においては、学校の中庭や校庭で植物や生き物探しを行った。知っているものや初めて見るものを発見することに喜んだり、気付きを発表したりする様子が見られた。また、花や生き物の名前に興味をもち、教師に質問をしていた児童もいた。一方で、自分の生活経験から得た知識に留まっているため、生活経験の場が限られている児童は、季節の特徴や植物や生き物について捉えきれていない様子であるととも、興味・関心が薄い様子であった。

2 実践の手続き

(1) 指導計画及び支援方法

①事前実態把握（第1回）

②地域の人材資源を活用した町たんけん学習（第2、3回）

③地域の人材資源および自然資源を活用したこどもの森における学習（第4、5回）

④事後実態把握（第6回）

⑤お世話になった地域の方々をお招きした七夕会（第7、8回）

を設定する（全8回）。⑤については、地域資源活用において、児童が主体となって行った学習として設定する。なお、地域資源の活用にあたり、⑥地域の方々との事前打ち合わせを行う。

① 事前実態把握

夏について知っていることを、一枚の画用紙に記入する。児童の実態より、記入方法は文字、絵どちらでも可とし、記入時間は、自力で集中して活動できる10分間とする。補助発問として、「たべもの」、「はな」、「むし」、「きのみ」、「あそび」の5つの視点を取りあげる。この項目は、昨年度の季節の学習の中で得られた児童の気付きを分類した内容である。また、文字の記入が難しい児童においては、何の絵を描いたのか教師が確認する。

②地域の人材資源を活用した町たんけん学習

児童が、教師が選出した学校近辺の地域の方々に、夏について知りたいことの質問を決め、一問一答形式で質問を行う（例：「夏の食べ物は何ですか」）。2年生児童は、その質問・回答に続けてさらに何らかの質問を重ねること（例「それはおいしいですか？」）を目標にする。

事前指導では、インタビューする地域の方の紹介、挨拶や質問の仕方について学習・練習を行う。

事後指導では、写真や動画を見て振り返り活動を行い、学んだことを絵や文字でワークシートに記入する。なお、児童の活動中の発言やつぶやきは、ICレコーダーで記録を行う。

② 地域の人材資源および自然資源を活用したこどもの森における学習

弘前市の自然観察野外活動の場でもある「こどもの森ビジターセンター」において、現地の職員の方2名（以下、外部講師）に夏の植物、沢遊びと水辺の生き物観察について教えてもらいながら学習を行う。また、カブトムシの幼虫をいただいて持ち帰り、学校で世話・観察を行う。

事前指導では、外部講師の紹介や2つの学習内容、現地での約束についての確認、挨拶について学習・練習を行う。

事後指導では、写真や動画を見て振り返り活動を行い、学んだことを絵や文字でワークシートに記入する。なお、児童の活動中の発言やつぶやきは、ICレコーダーで記録を行う。

④事後実態把握

事前と同様の手順で行う。

⑤お世話になった地域の方々を招いた七夕会

町たんけん及びこどもの森でお世話になった方々を招き、本校で児童が企画した七夕会を行う。児童が招待したい方々を選出し、七夕会のプログラムについても児童と教師が話し合って計画を立てる。また、招

待状やプログラム、教室の装飾、ゲームで使用する物品の準備、当日の司会や来校者への案内、各ゲームの説明等も児童が行う。

事前指導では、役割確認、相手への伝え方や話す内容確認・練習等を行う。また、七夕で使用する笹については、児童がこどもの森での学習を思い出すことができるように促し、外部講師から、いただいて準備をする。

⑥地域の方々や外部講師との事前打ち合わせ

地域の方々や外部講師とは、当日の流れや学習内容やねらい、児童の実態等について、事前に打ち合わせを実施する。地域の方々においては、質問内容の確認を行い、外部講師においては、児童の実態を基に活動内容や学習形式、取り扱う植物や生き物について、話し合いを行う。

3 検証方法

①事前実態把握、②地域の人材資源を活用した町たんけん学習、③地域の人材資源および自然資源を活用したこどもの森における学習、④事後実態把握、⑤お世話になった地域の方々をお招きした七夕会のテキストデータを分析する。テキストは、①④は、画用紙に記入された絵や言葉、②③⑤は、活動中の児童の発言及び振り返り学習におけるワークシートとする。なお、テキストは児童5名分を集約し、教員や地域の方の発言は含まない。

Ⅲ 指導の実際

1 事前実態把握

「夏といえばなーんだ？」の発問に対し、各児童が、1枚の画用紙に自分が知っている夏について絵や文字で表現した（図1）。補助発問の「たべもの」、「はな」、「むし」、「きのみ」、「あそび」の5つの視点に着目しながら、どの児童も10分間、書き続けていた。学習に取り組みながら、何を描いているのか、描いている物について知っていることや経験した出来事について話す児童も見られた。なお、平仮名が未習得な児童については、何の絵を描いたのかを教師が口頭で確認した。

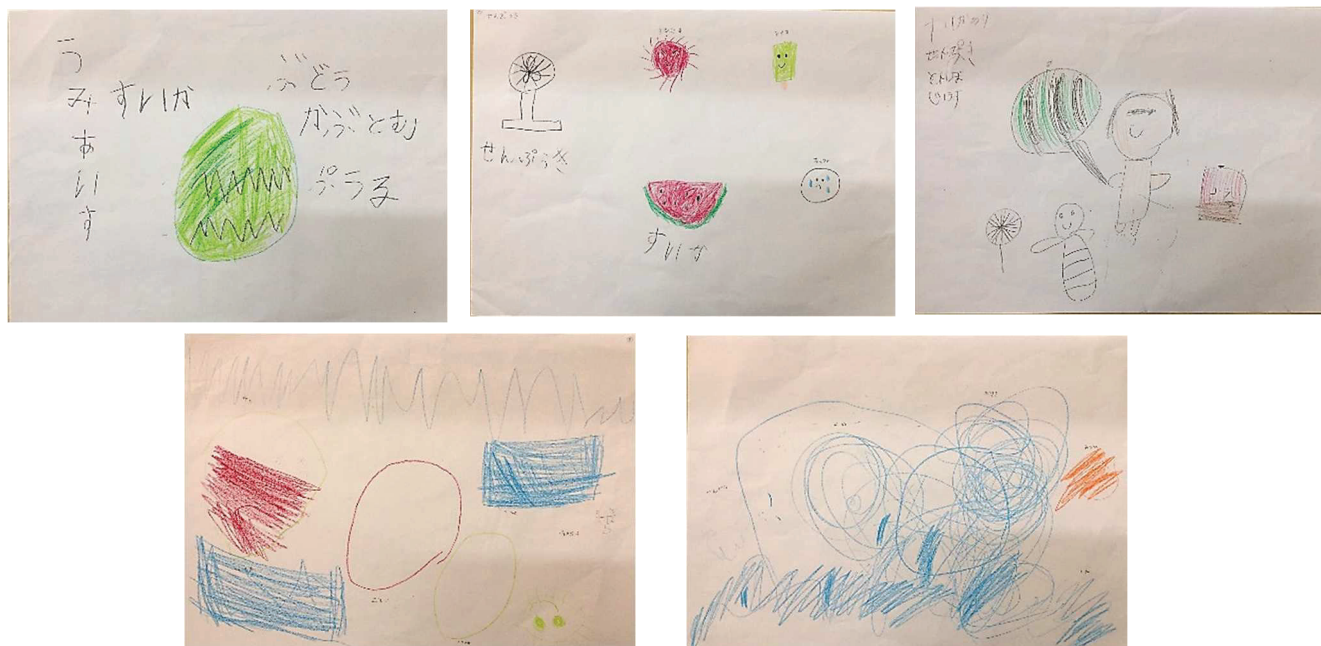


図1 事前実態把握における児童の夏のイメージ

2 地域資源を活用した学習

(1) 地域の人材資源を活用した町たんけん学習

①地域人材との関わり場面

学校近辺の交番、郵便局、カフェ、コーヒー屋さん、ドラッグストア、信用金庫、町会長、美容室の計8か所の施設の方々に夏について知りたいことを児童が質問した。地域の方々は、教師が選出・調整した上で児童に提案した。また、質問内容については、事前実態把握終了後に児童が「夏の食べ物」と「夏の花」について調べると決めた。

1年生児童2名は、コーヒー屋さんと美容院の2か所で質問を行った。事前にインタビューの仕方を練習し、当日もインタビューカードを見ながら行ったため、調査目的だった「夏の食べ物」についてスムーズに聞くことができた。また、地域の方も児童が分かりやすい言葉で丁寧にゆっくりと話していた。

2年生3名は、カフェ、交番、信用金庫、ドラッグストア、町会長、郵便局の6か所で質問を行った。事前指導で練習した質問を重ねることについても、「夏の食べ物は何ですか?」「すいかです」の返答後、「どうやって食べたら美味しいですか」と関心があることを質問したり、「夏の花は何ですか?」「ゆりです」の返答後、「その花は何色ですか」と不明な点について質問したりしていた。また、地域の方の「スイカ割りをしたことはありますか」などの質問に対して、自分の経験を振り返り、受け答えをしていた。地域の方々は、児童の質問に対しての返答に加え、夏の生き物や暑さの話など、夏について話題提供をしてくれた方もいた。

1、2年生ともに、事前指導で挨拶の練習を実施していたこともあり、「ありがとうございます」、「さようなら」、「こんにちは」など挨拶に関しては進んで行っていた。また、目的である、「夏の食べ物」や「夏の花」以外に、「ケーキはありますか?」、「いい匂いがする」、「2階にも行っていいですか」、「髪切りに来たいな」、「(ポスターを見て)泥棒ですか」、「お菓子を触ってもいいですか」、「名前を教えてください。ぼくの名前は…」などの発言が見られ、地域の様々な場所や人について興味をもっている様子だった。



図2 地域の人材資源を活用した町たんけん学習の様子

②振り返り場面

町たんけんの2日後、写真や動画を見ながら振り返り学習を行った。思い出す手掛かりとして、写真

や動画を用いたが、児童は地域の方々が回答した内容をおおむね覚えていた。また、施設の様子について「豆があったよ」、「悪い人がいっぱいいるポスターがあったよ」等、印象的だったことを思い出し、互いに教え合っていた。

ワークシート（図3）の記入は、絵と文字どちらでも記入可としたため、平仮名が未習得の1年児童は、絵で表現していた。質問場面では、口頭でのやりとりになり、教えてもらった物を目にすることはできなかった。そのため、振り返り場面で、知らない花をタブレット端末で調べる活動を行った。実際に目にすることで、「この花、家の近くで見たことある」、「初めて見たけど、きれい」などの感想を述べていた。



図3 町たんけん振り返りワークシート（一部）

（2）地域の人材資源および自然資源を活用したこどもの森における学習

①地域人材及び自然資源との関わり場面

こどもの森では、ネイチャービンゴ（図4）と沢遊びを行った。

ネイチャービンゴでは、笹の葉、もみじいちご、くわの実、杉の葉、ミズ、ハナイカダ、ふきの8つの夏の植物を取り扱った。8つの植物に関しては、教師と外部講師の打ち合わせにより、児童が興味・関心をもちそうな植物や何となく知っている可能性がある植物を取り上げた。笹の葉は、七夕の印象があるためか、すぐに見つけ出していた。足元に生えていた竹の子に興味を示す児童が多く、「昔話で見



図4 ネイチャービンゴカード

たことある」、「抜きたい」と、実物を見て感動や驚きの感情が湧き上がっている様子だった。また、探すだけではなく、触れたり食べたりする活動も取り入れたため、五感を使いながら学習に取り組んでいた。さらに、児童が言語情報だけではなく、視覚的情報を手掛かりに探すことができるように、ネイチャービンゴの教材は、教師と外部講師で打ち合わせをしながら作成した。同じ物を見つけようと探し、何度も外部講師の方に「見て」、「これ？」と確認をしていた。

沢遊びおよび水辺の生き物観察では、足だけを沢の水に入れ、水遊びや網で生き物探しを行った。沢の水に足をつけて、「冷たい」、「寒い」と驚いたり、「なんかいた」、「動いた」と夢中になって生き物探しに取り組んだりしていた。見つけた生き物については、外部講師の説明のもと、観察を行った。生き物はもちろん、使用していたスポイトにも興味をもっていた。

また、最後にお土産としてカブトムシの幼虫を10匹いただいた。外部講師の方との事前打ち合わせにおいて、学習日が初夏の時期で、夏の生き物についての学習が難しいため、学校で幼虫を育てる学習を取り入れることにした。学級に戻り、各児童の虫かごに幼虫を入れて渡した。自分の虫かごに入った幼虫を触ったり、見たり、名前を付けたりしながら、親しみをもって触れ合っていた。



図5 地域の人材資源および自然資源を活用したこどもの森における学習の様子

②振り返り場面

こどもの森での学習2日後、写真や動画を見ながら振り返り学習を行った。ワークシート（図6）の記入では、馴染みのない植物の名前については覚えていない児童が多かったが、色や形、味などの特徴を思い出しながら取り組んでいた。特に、竹と食べた木の实について印象深かった児童が多かった。



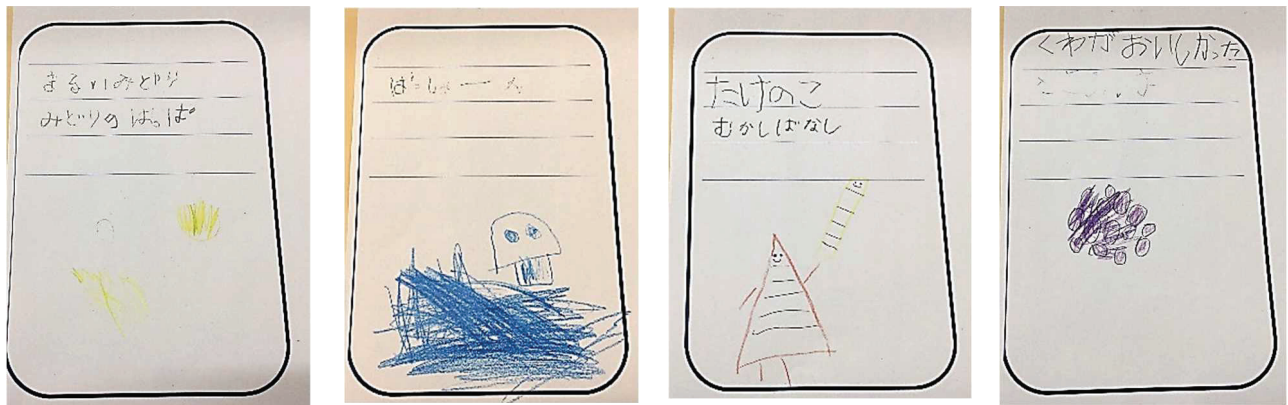


図6 こどもの森振り返りワークシート（一部）

3 事後実態把握

事前と同様に実施した（図7）。事後では、これまでの自分の生活経験に加え、学習を通し、地域の方に教えてもらったことを思い出して書こうとする児童が多かった。特に、食べ物に関する表現が多く、10分間では足りないほどに、書き続けている児童もいた。



図7 事後実態把握における児童の夏のイメージ

4 お世話になった地域の方々をお招きした七夕会

（1）準備活動場面

こどもの森における学習後、学級で七夕会を企画した。七夕には笹の葉が必要であると児童から発言があり、どのようにして準備するかを話し合った。何人かの児童がこどもの森に竹があったことを思い出し、外部講師の方にいただけるかを電話で確認した。

七夕会に誰かを招待することを伝え、「竹をくれた〇〇さんと呼ぼう」と児童から提案があった。夏の学習で他にお世話になった人を問うと、質問に答えてくれた方全員を呼びたいと話していた。

七夕会のプログラムや準備する物についても児童同士の話し合いの中で決定した。教師が、教えてもらったことを取り入れたい旨を伝え、児童から、教えてもらった美味しいすいかの食べ方であるすいか割りをする事やボウリングは、教えてもらった食べ物（きゅうり、すいか、みかん、さくらんぼ、桑の実）に見立てた球を新聞紙で作って投げる事、釣りも魚ではなく、教えてもらった夏の物を釣る事の提案があ

った。他にも、招待状や手紙のプレゼントを準備することも提案があり、お世話になった地域の方が喜んでくれるように、様々なアイデアを考えていた。

(2) セタ会

セタ会当日は、地域の方々の都合もあり、交番、町会長（ご夫婦）、こどもの森（2名）、郵便局の計6名の方が来校した。事前学習では、会の役割、会の流れ、地域の方の中で誰と一緒に活動するのか、初めて学校に来る地域の方に何を教えれば良いか、伝え方などを確認した。そのため、セタ会では、教室や手洗い場所、座る場所、中庭、玄関まで案内をしたり、ゲームの説明をしたりする児童の姿が見られた。また、活動をする中で、地域の方も児童へ話しかけてくださる場面も多く、畑の話や昨年までのセタ会の話、準備物についての話など、様々な内容のやりとりを行っていた。児童が決めたプログラムだったこともあり、児童自身も楽しむ中で、「〇〇さんすごい」、「たのしいね」、「これ面白いでしょ」、「一緒にがんばろう」などと、地域の方とゲームやすいか割りなどの楽しさを分かち合っていた。また、地域の方からカナヘビをいただき、児童は「ペットにする」、「トカゲだ」と初めて目にする生き物に大興奮していた。

最後のお別れの場面では、いつまでも「バイバイ」、「また来てね」、「がんばってね」などと伝えながら手を振り、別れを惜しむ児童が多かった。一緒に活動した地域の人への親しみが大きくなっている様子だった。



図8 セタ会の様子

IV 結果

1 事前実態把握

図9は、学習前の児童5名の夏に対するイメージのテキストデータによる抽出後リストを示した。上位4つの「海」、「すいか」、「プール」、「扇風機」は、児童にとって身近なものであり、児童がこれまでの実生活の中で経験してきたものが挙げられていると推測される。一方で、「いちご」、「とんぼ」、「人間」など、季節が混同していたり、季節そのものの認識が曖昧だったりする児童も見られた。

#	抽出語	品詞/活用	頻度
1	海	名詞C	3
2	すいか	タグ	2
3	プール	名詞	2
4	扇風機	名詞	2
5	いちご	タグ	1
6	おひさま	タグ	1
7	すいかわり	タグ	1
8	とんぼ	タグ	1
9	みかん	タグ	1
10	アイス	タグ	1
11	ジュース	名詞	1
12	人間	名詞	1
13	太陽	名詞	1
14	竜巻	名詞	1

図9 事前実態把握の抽出語リスト

2 地域資源を活用した学習

(1) 地域の人材資源を活用した町たんけん学習

図10は、地域の人材資源活用の町たんけん学習における児童の発言、ワークシートをテキスト分析し、図に示した。インタビュー内容の「夏の食べ物」については、サブグラフ【02】【14】より「すいか」、「アイス」、「そうめん」、「きゅうり」、「夏の花」については、「ゆり」、「ひまわり」、「あじさい」、「ばら」があることを知り得ている。また、物の名称に共起している文字から、「すいか」は「冷やすと美味しい」、「割ると美味しい」、「転がる」、「アイス」は「山で食べると美味しい」、「ゆり」は「オレンジ色」と、より詳しい情報も得ていることが確認できる。これは、Ⅲ 指導の実際で述べたとおり、2年生児童が、一つの質問に対して2回やりとりをしていたことが影響したと推測される。

さらに、以下の抽出語や共起語からは、インタビューの目的以外に児童が地域の人や施設、仕事に興味・関心をもったことが分かる。サブグラフ【01】【05】の「僕の名前は」、「二年生」、「誕生日」、「好きな食べ物」等からは、地域の人に自己紹介をしていること、サブグラフ【03】の「110番」、「怪しい」、「泥棒」等からは、交番のポスターに好奇心をもったこと、【02】【15】「ケーキ」、「食べてみたい」、「豆」、「いい匂い」等からは、コーヒー屋さんに興味をもったことや自主的に関わろうとしたことが確認できる。

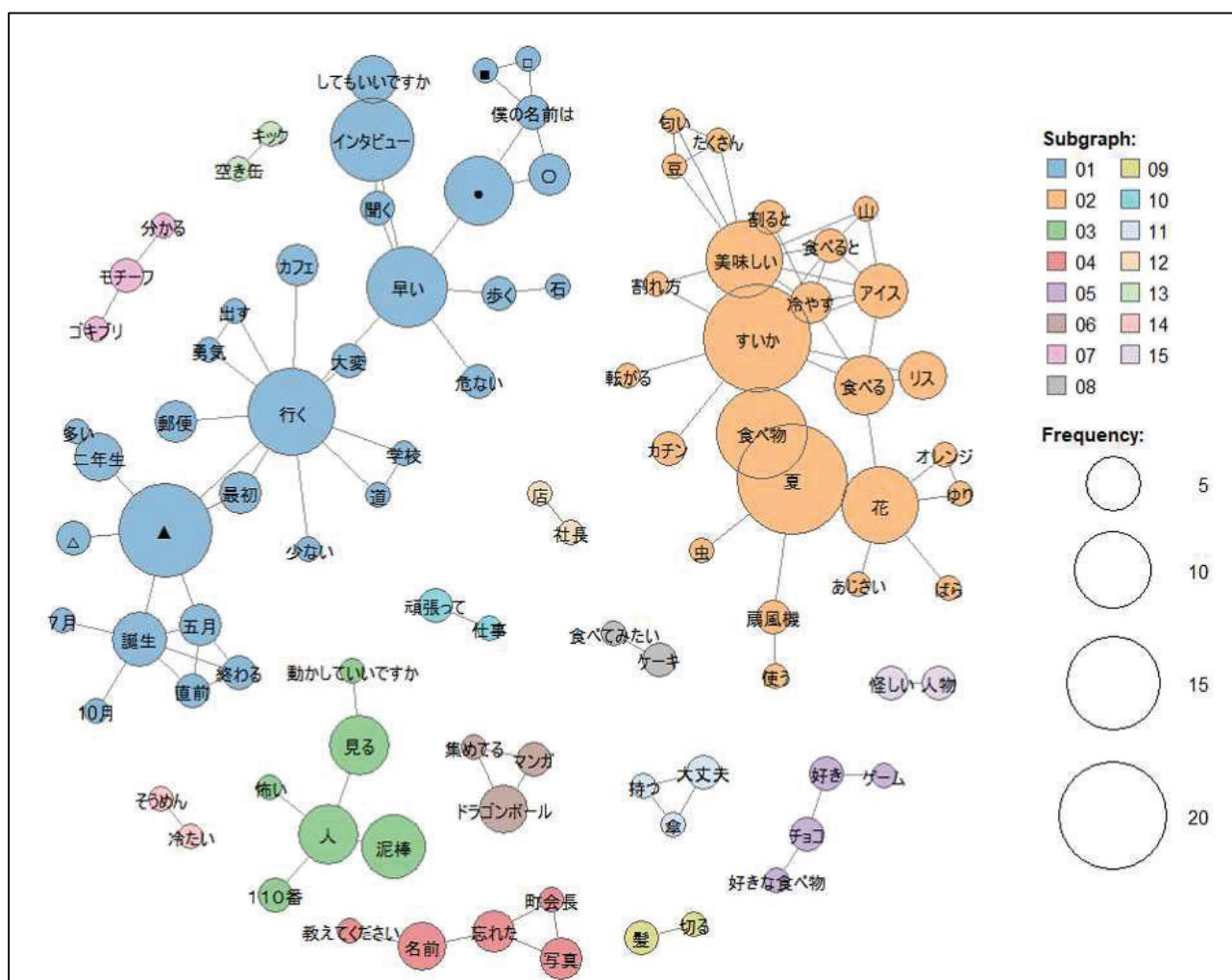


図10 地域の人材資源活用の町たんけん学習における共起ネットワーク図

※設定 【集計単位：文、出現回数：1回以上、共起関係：上位120】

※児童名を○、●、□、■、▲に置き換えている。

【図の見方】

共起ネットワークとは語と語のつながり（共起性・関連性）を視覚化した分析手法。円の大きさは頻度、線の太さは関連性の強さを表す。共起ネットワークでは、他の語との関わりが弱い場合や単独で使用されやすい語は表示されない。

（２）地域の人材資源および自然資源を活用したこどもの森における学習

図１１は、地域の人材資源および自然資源活用の学習における児童の発言、ワークシートをテキスト分析し、図に示した。外部講師である、サブグラフ【01】の「鳴海」、「稲部」の語の出現頻度がどちらも１０以上であり、「見せて」、「見て」の語が共起している。児童が進んで外部講師の方々に話しかけ、自分の意思を伝えていることが分かる。

また、水遊びが好きな児童が多いため、サブグラフ【01】の「プール」、「行く」等からは、沢遊びに対する期待感が読み取ることができる。

さらに、抽出後をいくつかの語のまとまりに分類してみると、図１２のとおりになる。体験的な活動により、感情や行動に関する語、五感に関する語、様子に関する語の広がりが生じたと推測される。また、語の中には、出現頻度が２０以上ある「すごい」、「たかーい」は、小高い山に登ったときに児童が発した言葉である。夏についての学習内容以外でも自然資源を直接体験できたからこそその得られた気付きも見られた。

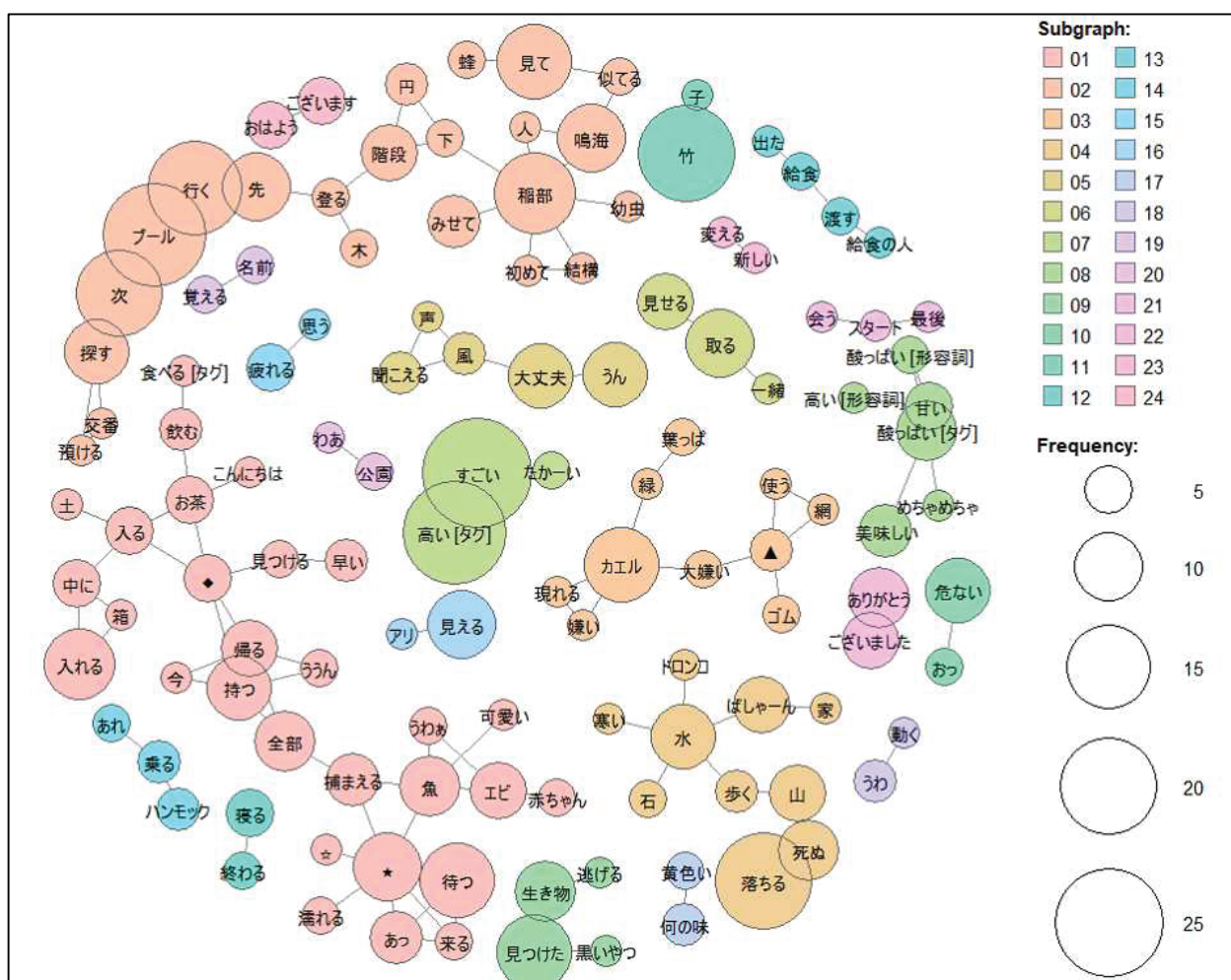


図１１ 地域の人材資源および自然資源を活用したこどもの森学習における共起ネットワーク図

※設定 【集計単位：文、出現回数：２回以上、共起関係：上位１２０】

※児童名を、★、▲、◆に置き換えている。

語の分類	抽出語
感情や行動 に関する語	行く、探す、見つけた、見て、見せて、見える、捕まえる、乗る、落ちる、入れる、取る、覚える、すごい、危ない、うわあ、わあ、うわ
五感に関する語	聞こえる、黒いやつ、酸っぱい、美味しい、甘い、緑、黄色い、味
様子に関する語	可愛い、寒い、たかーい、高い、嫌い

図12 抽出語の分類表

3 事後実態把握

図13は、学習後の児童5名の夏に対するイメージのテキストデータによる抽出後リストを示した。事前と比較し、食べ物、「きゅうり」、「さくらんぼ」、「そうめん」、「夏みかん」、「ソフトクリーム」、「メロン」、花は「あじさい」、「ゆり」の語の出現している。また、その他に、「えび」、「くわがた」、「とかげ」、「幼虫」の生き物や「竹」、「川遊び」が挙げられている。これらは、2、3の結果からも分かるとおり、町たんけんのインタビューやこどもの森における学習を通して得られたられた知識と推測される。

#	抽出語	品詞/活用	頻度	
1	すいか	タグ	6	
2	川遊び	名詞	3	
3	あじさい	タグ	2	
4	きゅうり	タグ	2	
5	くわがた	タグ	2	
6	さくらんぼ	タグ	2	
7	そうめん	タグ	2	
8	ゆり	タグ	2	
9	夏みかん	名詞	2	
10	竹	名詞C	2	
11	えび	タグ	1	
12	さめ	タグ	1	
13	とかげ	タグ	1	
14	ばっしょん	タグ	1	
15	ソフトクリーム	名詞	1	
16	メロン	名詞	1	
17	汗	名詞C	1	
18	七夕	名詞	1	
19	暑い	形容詞	1	
20	幼虫	名詞	1	

図13 事前実態把握の抽出語リスト

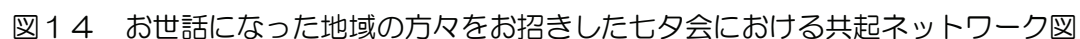
4 お世話になった地域の方々をお招きした七夕会

図14は、七夕会における児童の発言をテキスト分析した図に示した。以下の抽出語や共起語から、児童が主体的に地域の人と関わろうとしていることが確認された。サブグラフ【01】の「行こう」、「一緒」、「廊下」、「手洗い」、「階段」、「行く」からは、児童が校内を案内している様子、サブグラフ【02】の「夏」、「ボーリング」からは、ゲームを説明している様子が分かる。また、サブグラフ【03】の「ありがとう」、「バイバイ」、「また来てね」、「またね」、「がんばって」、「仕事」、「楽しかった」からは、児童が地域の人へ感謝の気持ちを伝えている様子や地域の人への親しみと再び関わりをもちたいという希望を読み取ることができる。

5 学習後の児童の様子

学習前は、虫を苦手とし、関心が薄い児童がほとんどであった。しかし、学習の際にもらったカブトムシの幼虫やカナヘビの世話を通して、カブトムシの幼虫に名前を付けたり、触ってみようと試みたり、眺めていたり、虫かごを持ち歩いたり、休み時間に虫捕りをしたりする児童の姿が多く見られるようになった（図15）。カブトムシが成虫になることを心待ちにし、夏休み明けに成虫になっていることを発見すると、餌やりや霧吹きの水やりなど、進んで世話をしたり、つかんで持ち上げたりするなど、生き物と触れ合っている

家庭からは、「家の畑で虫を見かけると悲鳴をあげて逃げていたのに、今では、幼虫を見ると、「これはチョウになるんだよ」と言って成長を感じる」という話を伺った。また、生活の中で自然について分からないことがあり、誰に聞けば分かるかなと問うと、外部講師の方の名前が挙がることがあった。さらに、七夕会後は、「〇〇さん好きだった」「また〇〇さん呼びたい」「〇〇さんとまた会いたい」と話していた。昨年度からの季節の学習が、生き物への興味をもつ機会や地域の中に自然について詳しい方がいることを知る機会、地域の人への親しみや興味をもつ機会になり得たのではないかと考えられる。



※児童名を▲、◇、◆、★に置き換えている。



- 93 -

V 考察と課題

【考察】

1 小学部低学年段階における地域との関わりの意義について

本実践での学習の目的は、「なつさがし」である。しかし、地域資源を活用した学習を通して、学習のねらい以外に、地域の人や施設、仕事に児童が興味・関心をもち、地域との関わりを深める機会となった。地域との学習を重ねていくことで、将来的には、身近な人々や自然に自分から働きかけ、自分の生活をより豊かなものにしようとする力につなげていくことが期待される。その過程である、小学部低学年段階では、地域に触れ、身近な地域に少しでも興味・関心をもち、自分の生活圏を広げていく機会としていくことが必要ではないかと考える。

2 地域資源を活用した学習効果について

地域の人材資源や自然資源を活用した学習を行うことで、児童の知見の広がりや深まりが見られた。

人材資源のみを活用した学習では、質問をすることで、地域の方々との関わりが生まれ、児童が知りたい情報を得ることができた。一問一答の形式が児童にとっては分かりやすいことに加え、事前に児童と簡単な質問内容を決め、質問の仕方を確認したことで、初めて関わる地域の方とも、ある程度スムーズにやりとりを行うことにつながったと考える。また、一つの質問に対するやりとりをさらに重ねて質問することを促した際には、2回目以降の質問に関する例を取り上げたことで、質問内容を更に深めようとする児童も見られた。

人材資源および自然資源を活用した学習では、児童の知見の広がりや深まりに加え、自ら外部講師や自然と関わろうとする児童の様子が見られた。やりとりが行いやすい一問一答の質問形式ではないが、自然資源が目の前にあり、直接体験をしながら学習に取り組むことで、児童の中で好奇心や興味・関心が自然発生的に湧き上がり、積極的かつ意欲的な姿につながったと考える。また、次々と生まれる気付きや疑問に対して、外部講師の方に専門的な情報をすぐに返答してもらったことで、学習効果が更に高まったと考えられる。

3 学習形態の違いによる児童の主体性の高まりについて

本実践では、地域人材を活用した町たんけん学習、地域人材および自然資源を活用したこどもの森における学習に加え、お世話になった地域の方を招いた七夕会を行った。先の2つの実践は、児童が地域資源から学ぶ学習形態であり、後の実践は、児童が主体となる実践であった。児童主体の七夕会では、児童が地域の方々のために自ら関わろうとする姿が見られた。準備段階から児童が誰を招待するのか、何をすると喜んでももらえるか、どんな風に話し掛ければ良いのかなど、自分たちで考え、活動してきたことで、児童の主体性の高まりにつながったと考える。家族や放課後等デイサービスなど慣れた人たち以外と話をする機会が多くはない児童らにとって、発話に「あ」、「えー」などのフィラーが多く見られ、いつもとは異なる環境の中で何を話すか、どのように話すかを自分なりに考えながら、活動に取り組んでいたのも特徴的だった。

このように、学習のねらいや児童に期待したい力によって、学習形態をどのように設定するか考慮する必要がある。

4 地域の方々との打ち合わせについて

学習前の関係する方々との打ち合わせは言うまでもなく重要である。本実践前にも、地域の方々や児童の実態や学習のねらい、学習内容について打ち合わせを行った。そのため、地域の方も児童も互いに安心して学習に取り組むことができた。また、日頃児童をよく知っている教師と専門的な知識を有する外部講師が打

ち合わせを行うことで、児童の実態に即し、好奇心がかき立てられるような学習内容を設定することができ、より児童の学習意欲向上につながると考えられる。さらに、地域資源を活用した学習を継続的に取り組んだり、内容を広げ深めたりするためには、教師と地域の方々との関係づくりが重要である。

5 地域人材活用学習の継続と拡大について

本実践では、昨年度の実践の外部講師の方に再度学習の依頼を行った。加えて、本実践で関わる地域の方々7名にも依頼した。さらに、昨年度の外部講師の方の紹介から、生き物の分野に詳しい外部講師の方を1名紹介していただいた。

地域人材活用の継続については、児童が昨年度の学習内容や外部講師とのやりとりを思い出したことで、今年度も外部講師の方の名前を呼んで積極的に関わろうとすることにつながったと感じた。また、外部講師の方も、打ち合わせの中で、児童のことを思い浮かべながら取り扱う植物や生き物について話している様子が見られた。児童、外部講師が互いに安心してコミュニケーションを図りながら学習を進めたり、より学習内容を深めたりする点において、地域人材活用の継続が効果的だったと考える。

また、地域人材活用の拡大については、関わる方々を増やすことで、児童が様々な地域の人と接したり、その人に関わる仕事や施設について知ったりする機会になった。児童の生活圏や興味・関心を広げる上では、地域人材活用の拡大が効果的だったと考える。

【課題】

1 効果的な地域資源との関わりと児童の障害特性や課題について

より効果的に地域資源活用の学習を行うためには、児童が地域資源と関わるための、社会性やコミュニケーション力、全体的な運動能力、認知力などの力が不可欠である。そのため、児童個々の実態に日々の自立活動における指導はもちろん、学習に取り組む前段階における指導の工夫や、学習時における手立てや支援方法などを考慮していく必要がある。

2 日常への広がりにつなげるための教師の役割について

地域資源を活用した学習を通して、その時間における学習内容が理解できたかどうかには留まらず、学習で得た学びや地域資源への興味・関心や関わりを日常生活へつなげ広げていくことが、将来的な児童の実践力につながると考える。本実践では、「なつさがし」の学習場面以外で興味・関心や気付きを広げられるように、七夕の笹をいただく活動や学校でカブトムシやカナヘビの世話・観察を行う活動を取り入れたところ、学習後も、以前生き物が苦手な児童でさえ生き物への関心の高まりが見られた。

児童の生活へより広げていくためには、2点考えられる。第一に、地域資源を活用した学習を行う上で、教師の役割を見直す必要がある。学習の事前、事後指導や学習間の振り返りや次時の学習へのつなげ方など、検討の余地がある。第二に、地域資源への関心についての般化である。本実践では、葉っぱなら●●さん、カブトムシなら▲▲さんのように、本取り組みを思い出して点として結び付けることはできたものの、児童が自分から広く地域資源の活用を発想できるところまでにはいたらなかった。このような地域資源を活用した学習の際には、発達段階によって、どの程度、生活への広がりを児童へ期待したいのかを、教師側で明確にしていかなければならないと考える。

以上のことを検討することで、地域資源を活用した学習が、より自分の生活の豊かさへつながるのではないかと考える。

VI 参考・引用文献

牛澤賢二（2018）『やってみようテキストマイニング—自由回答アンケートの分析に挑戦！』朝倉書店。

中丸信吾、渡邊貴裕、渡正、尾高邦生（2022）「教師からみた知的障害のある生徒における自然体験活動を取り入れた生活単元学習の学びのプロセス」『野外教育研究』第25号, 日本野生教育学会, pp.99-110.

山崎清男、中川忠宣、深尾誠（2010）「地域との関わりによる子どもの学習活動の推進」『生活体験学習研究』第10号, 日本生活体験学習学会, pp.35-41.

文部科学省「地域と学校の連携・協働の推進に向けた参考事例集」インターネット, <https://manabi-mirai.mext.go.jp/jirei/jireishu/chiki-gakko.html>（2023/10/27 にアクセス）